

中央大学法科大学院

新司法試験

合格者祝賀会

153人

合格おめでとう！

祝意の輪広がる

平成19年の「中央大学法科大学院 新司法試験合格者祝賀会」が10月3日、駿河台記念館で盛大に催された。153人の合格者のうち、この日は138人が出席、来賓らを交えて祝意の輪が広がった。達成感に満ち溢れ、自信と誇りを胸にした合格者らの笑顔は、晴れの舞台を一層輝かせていた。



【学生記者取材班】

池田園子 = 法学部3年
駒田恵 = 法学部2年
岩片理紗 = 文学部1年
国本悠希 = 商学部1年

▲来賓らを交え乾杯

◆日々の努力を重ねて

午後6時、開会。拍手に迎えられて合格者が入場。138人の表情は、みんな晴れやかだ。はじめに永井和之総長・学長が「おめでとうございませう」と挨拶。ご自身の司法試験合格は40年ほど前で、「忘却の彼方である」と会場の笑いを誘ったうえで、「これは合格者の出発を祝う会。この機会をいかして来賓の方々とお話して、今後の精進に役立てて頂きたい」と述べ、祝意を表した。

続いて鈴木敏文理事長が祝辞。「みなさんは司法試験というひとつの関門を通過したにすぎない。今後の司法修習で力をつけてほしい」と述べ、これからも気を引き締めて臨むようお願いを送った。

来賓祝辞には中大OBのおふたりの最高裁判所判事が立った。甲斐中辰夫判事は、自らが司法試験に合格したときを思い起こし、「とにかくホッとした。それ以上の感慨はな



永井和之総長・学長が『おめでとう』とお祝いのあいさつ

かった」と振り返った。「日々の努力の積み重ねが大事。それによって立派な人物になれば、自然と地位、ポスト、お金はついてくるものだ」と激励。

次に才口千晴判事が登壇。司法修習を終えてからの二回試験（司法修習中の試験）で、不合格者が多く出ている現状に触れ、「1年の司法修習は短い。うかうかせずに取り組むように」と叱咤。「二回試験に受かって、一刻も早く法曹になつて下さい」と辛口で合格者を祝った。

続いて久野修

慈・中央大学学員会会長が「みなさんは大きな宝。中大の名を大きくするために活躍してほしい」と乾杯の音頭をとり、懇談に移った。



鈴木敏文理事長（左）らを囲んで懇談

◆親子三代の弁護士へ

合格者は男性陣がスーツでピシッと決めている一方、華やかなドレスやワンピースに身を包んだ女性たちの姿も見られた。そんな会場で、鮮やかな緑のドレスが映えたのが清源万里子さん（早稲田大学卒）。周り



清源万里子さん

には、話をしようと近寄る人が絶える様子がない。モデルをしているという。納得である。

早稲田大のロースクールは3年コースが標準となっていたため、既習者向けコースのある中大ロースクールへ進学を決めた。「自分が今

まで勉強してきたことを評価してくれると感じたから」とも。

父と祖父は共に中央大学卒の弁護士。清源さんもふたりの影響で小学校のころには「当たり前のように『弁護士になろう』」と想っていましたという。反発を感じるようなこともあったのでは、との問いに、「ありませんでしたね」とさ

らり。

清源さんは、モデルとして2月にはDVDが発売される計画だったが、司法修習生となり、公務員の兼業禁止義務に触れるため、10月11日にモデル業を退職した。「夢」というタレント弁護士を目指し、弁護士への研修に専念することになる。

清源さんが「親子三代」なら、今朝丸貴さん（中央大学卒）は兄弟で法曹界入りを果たしたエリートだ。「兄が司法試験のために頑張ってい



今朝丸貴さん

る姿を見ていたので、僕も自然と司法試験を目指すようになった」と語る。

「実務に即した授業を受けたかったので、実務家教育を掲げる中大を選びました」という。兄と同じく弁護士を志望。その理由は「裁判官、検察官は立場上、公務員なので割り当てられた仕事をこなすしかありません。その点、弁護士は仕事の選択の自由があります。自分の方針が貫けるところが魅力的に感じました」と明確だ。

「将来は裁判官を目指していま

す」とはっきり宣言するのは、竹中紫穂さん（中央大学卒）。



竹中紫穂さん

平成11年の「抵当権侵害に関する大法廷判決」の報道を見て、「たった一枚の判決文をきっかけに人を喜ばせられるのはすごいことだと思えば、私の判決で誰かを喜ばすことができればいい」と裁判官を志望しているそう。

◆外交官か弁護士かで迷いも

「弁護士への道を進むか進まないか、いつまでも迷ってないで早い時

期に腹をくくるべきだ」と話すのは
鍛治美奈登さん（中央大学卒）。今は



鍛治美奈登さん

「周囲の人たち全員に感謝です。確かに受験は自分一人の戦いですが、受験に立ち向かえるように精神的に支えてくれたのは友人や家族でした。彼らの大切さを改めて感じました」と感謝する。

会場内に工学部出身の合格者がいた。**増田雅史さん**（東京大学卒）だ。なぜ法律家の道に？「ちょうど自分が卒業する年にロースクール制度ができると聞いたので、やってみようかと考えた」。

えっ、そんな簡単に？「というのは飲み会用の話で…」と笑う。

「自分が暮らしている国や社会を一番幸せにできる手段が弁護士だと思っただから、というのが理由ですね」と今度は真顔で答えてくれた。

出産をしても続けてゆけるかなと。やっぱり女性としては重要なことじゃないですか。あと、せっかく仕事をやるなら困った人を助けることができる仕事がいいなと思っただんで」という。

司法試験に合格した喜びについて

中大ロースクールを選んだのは「消去法だった」と話すが、入学してみると良かったと実感できる点多々あったという。「中大出身の法曹人口の多さとロースクール自体の人の多さ。いろいろな人に出会える

のがいい。そして先生方の姿勢ですね。どんな嫌らしい質問をぶつけても逃げるのではなく、真摯に答えてくれた」とまた笑った。

◆合格し、親孝行ができた

遠藤輝好さん（慶応大学法学研究



遠藤輝好さん

は学校に来て、夜の11時過ぎまで勉強に励んだ。

同じ目標を持つ仲間たちと話すことによって、悩みを分かち合った。

「そのおかげか、モチベーションが下がることはなかった」と話す。

今回で2度目の新司法試験挑戦。「ひと安心しました。自分より両親の方が喜んでくれたかも」と言い、表情を崩した。

弁護士を目指す。「裁判で」勝つべき人は勝つ、と思う。依頼が来れば何でもしたい。頼りになる町の弁護士さん、になった遠藤さんの姿を何となくイメージした。

「嬉しいけど、とにかく安心したという気持ですね。ようやく親孝行が出来ました」と語るのは、**下村哲也さん**（東京大学卒）。

東大を卒業し、4年間、社会人経験を積んだ後に、中大法科大学院に入学。「司法試験の伝統は勿論、OB組織のつながりの強さは中大ならでは」と絶賛した。

科卒)にも中大法科大学院を選んだ理由を聞いてみた。「説明会で、先生方が熱意を持っていてるように見えた。ここなら大丈夫だと感じた」という。勉強は思った以上にハードだった。授業開始1時間前の9時に



下村哲也さん

家では集中できないため、朝10時から夜12時まで、法科大学院の自習室で勉強した。「勉強か、飲んでいるか、寝ているか、だった」と笑わせてくれた。スランプに陥ったときは、との質問に「ひたすら勉強するしかない。悩む暇があれば条文をひたすら読んだ方がよい」とピシヤリ。得たものは？との質問には、「いろいろな友人」との答え。「一緒に勉強していくうちに、お互いレベルが上がる。独りよがりではダメです」とも付け加えた。将来は弁護士を

指す。「やはり自由がきくのが良い。ダイレクトに感謝されることもあるから」というのがその理由だ。

◆ベンチャー企業から法曹界へ

同じく社会人を経験したのは山崎健介さん（青山学院大学卒）。大



山崎健介さん

学卒業後からロースクールに入学するまでの間に社会で経験を積もうと、ベンチャー企業であるウエザーニューズに就職し、営業を担当。ウエザーニューズとは、携帯の天気予報のサイトを運営する会社である。

銀行など他数社からも内定をもらったが、「普通の会社だと初めのうちは下積みしかやらせてもらえないですよ。僕は実務の経験を積みたかったので、あえてベンチャー企業を選びました」。

ロースクールでの3年間は「人生でこんなに勉強したことはない」というほど勉強したそう。ロースクールでは目標となる先生や仲間がたくさんいましたね。もし1人だったらダメだったかもしれない」と振り返る。

公認会計士の資格を持ち、会計事務所にも勤めていたのは、高橋久美子さん（中央大学卒）。なぜ法曹を志されたのでしょうか？と問うと、「そうですね。民法や会社法などの法理論がとても面白く思えたんです」との返事。3年後にロースクール制度ができるのを知ってからは、会計事務所に勤めながらそちらを指そうと考えたそう。

以前は事業再生や倒産を専門に扱



高橋久美子さん

う弁護士を目指していたが、現在はそれらに留まらず企業法務やM&Aなど幅広い分野を視野に入れて自分に合ったものを探していきたい、と話す。

後輩たちへのメッセージをお願いすると、「まずは授業を受けることから。あの時授業で聞いたな、という話はいつか必ず役に立ちます。私も学生に戻れるのならもつと授業を受けておくんだったなと思います」とアドバイスをいただいた。

「学生記者の人ですよ？」と、

人ごみの中からわざわざ記者を探して、取材に応じてくれたのは佐々木修さん（早稲田大学卒）。



佐々木修さん

早稲田を卒業したのに、なぜ中央大学のロースクールを選んだのか？との質問には、「中大のロースクールの入学試験は小論文的な問題が多くて、早大に比べたら自分に合っていると思ったから」という。大学生の頃から弁護士をこころざし、予備校にも通っていた。「弁護士になるには、早めに勉強を始めておいたほうがよいと思います。未修で司法試

験合格はなかなか難しいことですかね」。

◆話上手で、噺家向き？

「学生記者、大変そうだねー。なんで始めたの？あれ？なんか僕がインタビューしてるね（笑）」と明るい雰囲気でもませてくれたのは、吉井悠介さん（中央大学卒）。

法学部を卒業していながらも、未修コースであった。「大学時代は法律の勉強に励むよりは、留学していて、3、4年までイギリスのスターリング大学で学んだ。そこで海外の法律に触れた」という。

今年の夏、一年生のゼミの指導に行った。しかし、「なんだか意気込みが少ないように思えた。ただ何も目標を持たないで大学生活をおくるのはもったいない。何かに向かって必死になれば苦しいことも乗り越えられるはず。常に初心で前向きに、熱い気持ちをもつことが大切です」と後輩にエール。



吉井悠介さん

途中、感極まって目を潤ませる高橋さんに、同期生から「頑張れ」の声援。「関わって下さった皆さんの人たちに勇気をもたらす、元気づけられた。入学できて幸せだった。今回の合格は1つの通過点。これから恩返しをしていきたい」と語った。

最終笑いが耐えず、話が上手な吉井さん。「もしや噺家のほうが向いているのでは？」とも思ったが、人に接することが多い弁護士。きつと好かれる弁護士になるに違いない。

◆謝辞で感極まるも同期が声援

懇談の後、先ほど紹介した高橋久美子さんが合格者代表として謝辞に立った。ステージ付近には同期生がわつと集まり、カメラのフラッシュがたかれた。

高橋さんは「楽しい行事があったわけではないけれど、1日1日が充実していた」と3年間の感想を述べた。

続いて、合格者で元応援団副団長の櫻井俊宏さんが突然指名され、ステージに上がった。眼鏡を取り、スーツのジャケットを脱いで、「フレイ・フリー中央」「フレイ・フリー、ロースクール」と声を張り上げ、会場の祝賀ムードを盛り上げた。

最後に大村雅彦・中央大学大学院法務研究科長が、閉会の挨拶。「それぞれの個性を磨き、大きな夢を持って、日々邁進してほしい。待っているは何も手に入らない」と積極的に前進することを呼びかけて、祝賀会を締めくくった。